SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

『禅林句集』の読み方：「アメリカ文学の禅」研究のはじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008658

『禅林句集』の読み方

―「アメリカ文学の禅」研究のはじめに―

重松宗育

I

言葉は、月を差す指である。禅の修行者の目標は、月そのものにあって、指にはない。だから、禅僧たちは、文字言語に悪口雑言をあびせ続けるのだ。

ぴたりの言葉　がんじがらめに　身をしばる杭(くい)[1]

このように言葉を非難する句は、禅の語録を繙けばあちこちに見られる。

禅の宗旨を一口で言うと、

お経読んでも　つかめはせぬぞ
言葉で言おうが　書こうがだめだ
赤子の心を　ズバリとつかめ
それができたら　みな仏[2]

禅の体験を、言葉によって表現するのは不可能である。

水さえ飲めば　すぐにも分かる
それが熱いか　冷たいか[3]

まさに、その通りである。水のことを知りたければ、水を飲んでみるのが一番手っ取り早い。

ただし、

言葉じゃ言わく　言いがたし[4]

などと言いながら、実際には、多くの禅僧たちが膨大な語録を残しているのだ。何故か。みずからの宗旨に反して、何故また、おびただしい〝言葉〟を世に残したのか。明らかに矛盾である。どう見ても、禅には逆説的なことが多い。

だが、冒頭に引用した句には、この疑問を解く手がかりが含まれている。要点は、いかにすばらしい表現であっても、言葉にこだわる限り、それは人の心をしばりつける杭（くい）にすぎない、ということなのだ。

臨済（りんざい）（？ ― 867）は、本当の悟りを得るためには、

釈迦に会ったら　釈迦でも殺せ
達磨に会ったら　達磨も殺せ[5]

とまで言っている。釈迦も達磨も、禅仏教徒の依り所、心の支えではないか。それなのに、殺してしまえ、と言うのだ。

煩悩は、しばしば鉄の鎖に例えられる。そして禅は、悟りまでも、鎖 ―― 金の鎖 ―― だと考えるのだ。たとえ金であろうが、それに執着する以上は、それもまた身をしばる鎖にすぎない。鉄であれ、金であれ、すべての鎖を捨て去ってしまえ。そしてその時はじめて、かけがえのない宝物が手にはいるのだ。無執着、自由自在、ここに真実の悟りがある。禅僧たちが否定してやまないものは、まさにすべての鎖、「身をしばる杭（くい）」なのである。

この点さえはっきりしていれば、言葉を全く無用のものとするのは当らない。第一、悟りに導くための手段として、現に修行者の指導の上で重要な役割を果たしているのではないか。と同時に、文字言語がなかったら、かけがえのない禅体験への手がかりを、後の世の求道者に伝え、普遍化していくこともできないではないか。言葉は、禅にとっても欠くことのできない手段である。これは否定できない事実だ。

こうして、言葉におぼれず、何とか言葉を超えた悟りの体験を表現する方法を求めた禅僧にとって、結局、象徴詩が最もふさわしい形式であった。言葉にしがたいものを表現するには、象徴主義を活用するのが最良の方法だからであ

る。この意味で、詩は最も禅に近い。あのまんまるの月の輝く様を見て、敬虔な思いに打たれた体験をもつ人なら、ただ指を見るだけで、その指先の示すものが何であるか直ちに理解できる。禅僧たちが、生涯を通じて様々な機会に悟りの詩（偈）を作ったのは、正にそのためであった。

こうした詩偈には多くの種類があるが、主なものは、「投機の偈」と「遺偈」である。前者は、悟りの瞬間の体験を詩にまとめたもの、後者は、弟子たちへの、いわば遺言であり、その詩には生涯の禅体験のすべてが凝縮されている。弟子たちは、師匠の死後、こうした詩偈や生前の説法を集め、語録を編集した。加えて、禅宗史や公案集も編纂され、不立文字を旨としているはずの禅僧たちが、奇妙なことに言葉の山を築いたのである。

このようにして、言葉のもつ象徴性を活用してきた結果、文字言語は禅の重要な要素となったのだ。そしてそれによって、時間空間をこえた、人と人との邂逅が可能となったのだ。

二つの鏡　互いにぴたりと　照らしあう(6)

矢尻と矢尻　宙に出会って　支えあう(7)

II

互いに異なる時代に生きた禅僧たちに、かけがえのない邂逅の機会を与え互いを結びつけたのは、正にこうした語録の存在であった。その出会いの最もいい例が、「著語」つまり先人の記録に、後代の禅僧が共感の言葉や自分の力量を示すための評語を記す慣習であろう。

例えば『碧巌録』などは、著語の典型的な例である。雪竇（980－1052）は、古来使われてきた公案百則を集め、それぞれに自らの見解を詩(頌)の形にして加え、『百則頌古』をまとめた。一世紀のちに出た圜悟（1063－1135）は、各則の公案と頌に散文の解説（評唱）を加え、先人の残した語句の一々に「著語」したのである。この百則の公案と雪竇、圜悟両禅師の書き加えたものが、後に『碧巌録』となって世に出た、というのがこの書の誕生の次第である。

雪竇の頌から一例をあげよう。

峰々の　うねって続く　　藍の一色[8]

これに対する圜悟の著語は、次の通り。

文殊さんをば　さて見てきたか

更に、雪竇が言う。

前に三々　後に三々[9]

これに対して、圜悟は次のように著語している。

足の下こそ　よく見てごらん

泥にいばらが　さてご用心[10]

茶わん落ちたら　茶たくが割れた
かけら五、六　　それ七つ

この「著語」ということは、公案を用いる臨済禅の修行の中でも重要な訓練の一つと考えられている。だから今日の日本でも、公案禅の修行者なら、著語のためのテキストである『禅林句集』や『塗毒鼓』は、必ず手元に置いてあるはずだ。

まず、『禅林句集』について。これは、15世紀後半に、日本の禅僧、東陽英朝（1428－1508）の編んだ『句双紙』に始まる。この『句双紙』は、後に巳十子（不詳）と呼ばれる人物によって増補され、1688年に出版された。それ以来今日に至るまでに、似かよった書名のものや収録語句の異なるものなど、種々の句集が世に出ている。

この『禅林句集』には、約6,000の句が収められている。その出典となった

書物は、禅籍、仏典、唐詩、宋詩など、極めて多方面に及ぶが、そのほとんどが中国の古典である。そして、それぞれの句は、漢字数に応じて、一言から十六言（八言対）まで12種類に分類されている。ただし、句の配列は全く恣意的で、何の順序立ても見られない。たとえ、このように手がかりのないことが修行上何らかの意味をもつとしても、修行者に大変な負担を強いてきたことは間違いない。それ故に、今日出されている句集はどれも、使用者の便をはかって何らかの配列が工夫されている。

かつて、寺の小僧は、専門道場（僧堂）での修行にはいる前に、師匠から『句双紙』を暗記させられた、ということである。それは厳しい訓練で、「句双紙三年、小僧泣かせ」という言葉が伝えられている。

『塗毒鼓（ずどつこ）』（本来は「ずどっく」と発音すべき）は、藤田玄路（1880－1935）居士の手になる二巻本で、これには禅宗の基本的な経文や語録が収められている。1916年に正編、1922年に続編が出たが、この『続編』は、最後の部分が句集となっている。その形式は『禅林句集』と同じで、2,400句以上が収録されているが、共通の句も少なくない。しかし、『塗毒鼓』の句集は、世に出て以来、修行者のあいだで『禅林句集』におとらぬ評価を得ているが、それは、十四言（七言対）の部分にすばらしい句がふんだんにあるためであろう。

公案の調べにおいて、老師は、修行者の見解を合格と判断すると、その公案に対する「著語」を示すことを要求する。修行者は、手元にある句集の中からその公案にふさわしい著語を選び出し、老師にそれを示すのだ。衣の袖から取り出した句集を、前から後ろから繰り返しめくりながら、何千も並んでいる句の中からぴったりの句を探す。ただし多くの場合、これは手洗いの中か、夜ローソクの明りの下でのことである。それは、修行道場では読書が大っぴらに許されていないからである。

実際、こうした著語の修行によってはじめて、自分の公案の体験がはっきり自覚できる場合も多いのだ。『禅林句集』も『塗毒鼓』も、このような意味で、禅を学ぶ者にとって必携の書とされてきたのである。

Ⅲ

禅語というものは、すべて何らかの意味で、悟りやその働きを表現している。

ここでは便宜上、古来、仏教で用いられてきた「体(たい)」、「相(そう)」、「用(ゆう)」という三つのカテゴリーに分けて説明してみたい。ただし、このように分類したとしてもそれはほんの間にあわせにすぎない。実際には多くの句が、一つのカテゴリーにおさまらず、互いに密接に重なりあっているのだ。その上、どの句も読者の洞察力の深さによって、それぞれ違った解釈が可能な場合も多いのである。以下、禅語の具体例を取り上げて、その読み方を示唆してゆくことにするが、それはあくまでも一つのヒントにすぎないことを重ねて断わっておく。

まず「体」つまり、悟りの本体を象徴する句から見ることにしよう。悟りの本体――それは宇宙の実在であり、「仏性」と呼ばれるもので、法とも真如とも涅槃とも、様々な名で呼ばれている。臨済は、これを「一無位の真人(しんにん)」と呼んだ。

修行者のめざすところは、日常的な自我の内にある、この宇宙大の「自己の本体(本来の事己)」にめざめることである。それは、煩悩の波のまにまに漂う卑小な自我を、捨てて、捨てて、捨て尽くしたところに現われる。それはまたこの私は一体誰か、何者か、と、問うて、問うて、問いつめた自己(己事)究明の結果でもある。そして、仏性とは自己の本体に他ならないと自覚する時、「本来の自己」の姿が明らかになるのだ。

仏陀なきあと何を頼りにすべきか、と問われて、「自己を灯とせよ、法を灯とせよ」と仏陀は答えた。禅は、この灯とすべき「自己」の自覚に裏打ちされた〝Individualism〟である。

ただ誠に残念なことに、「本来の自己」は姿形がなく、目に見えない。それで、

絵具ぬっても　描けはせぬぞ(11)

いくら呼んでも　返事はないぞ
いくら見たとて　形もないぞ(12)

この「形なき自己」には、当然のこと大きさがない。

ぐっと広げりゃ　宇宙と同じ
ぐっと縮めりゃ　毛よりも細い[13]

言葉で表現できないとしたら、何か目に見える、形あるもので象徴するしかない。それで、時には真珠に。

真珠、純金　値段がつかぬ[14]

時には、鉄。

八方、十方　鉄のかたまり　ただ一つ[15]

どこまでも　果てなく続く　鉄棒一本[16]

更にまた、月にも例えられる。

明月もなく　涼しい風も
吹かぬ家など　どこにある[17]

風が吹いたら　浮き雲消えて
山の端に出た　まンまる月[18]

この本源の世界では、万物は一体であり、平等である。

前見れば　めのうキラキラ
後を見れば　真珠キラキラ[19]

前も、後ろも、右も、左も、頭上にも、足下にも、どこを見渡しても、まばゆいばかりの宝石がキラキラ輝いているではないか。

緑の柳は　緑じゃないぞ
赤い花とて　赤くない[20]

このとき、いかなる差別(しゃべつ)も存在しない。万物が一体で平等の仏性の世界なのだ。そこには、柳もなく、花もなく、緑もなく、赤もない。男もなければ女もない。犬もなければ猫もない。この「色即是空」の「絶対無」の世界では、男も女も全く平等、何の区別も差別もない。犬も猫も等しく尊厳性をもつ。すべては、仏性につつまれて絶対平等なのだ。

よーく見よ　もともと何も　ないものを[21]

この「宇宙的無」こそ「形なき自己」であり、「本来の自己」の姿なのである。そしてそれこそ、我々の求める真実の自己に他ならない。

このあたりのことは、「十牛図」を参照すれば理解しやすいかも知れない。この「十牛図」というのは、禅の修行の過程を十段階に分けて図示したもので修行者にとっては格好の手引きである。ここでは十図のうち、特に最後の三図にふれたい。

まず第八図「人牛倶忘」。禅者はこの一円相を好んで描く。この円相の「無」は、森羅万象ことごとく、無差別に飲みこんでしまう。眼をよくあけて、円相の中を見れば、

聖人凡人　同じ釜飯
龍も蛇もが　ごちゃまぜに[22]

万物は一であり、一切は平等である。何故なら、万物はことごとく仏性を蔵しているからだ。ここに〝Zen　Universalism〟（普遍主義）がある。

だが、この一面の真実で満足していると、老師の叱責をうけるに違いない。「一枚悟りではまだだめだ。そいつはまだ死んでいて働きになっておらぬ。」

いり豆が　芽を出すわけは　ないものを[23]

ドクロ、ゴロゴロ　野原一面　ゴロロゴロ[24]

この「無」は空っぽだ。しかし、空っぽだからこそ、無限の可能性を秘めているのだ。何もないからこそ、そこは自由自在の創造の場となる。とかく控え目の方がより多くを物語るものだ。あるいは沈黙こそ、最大の雄弁かも知れない。正にこの「無」は、すべてを示し、すべてを物語っているのである。それは、いわば、何が飛び出すか分からない手品箱なのだ。

Ⅳ

次に、「相」の面から悟りを扱う句に触れてみたい。言語文字を超えた悟りの世界が、この現実界においてどのように顕現しているのか、という問題である。多くの場合、それは美しい詩の言葉に表現されている。悟りの眼を通して見れば、森羅万象、真実を物語らぬものはない。この大自然が、そのまま仏の姿に他ならないのである。

雨の竹　風の松
みんなそろって　禅を説く[25]

禅に饒舌はふさわしくない。だから、本当を言えば

雨の竹　風の松

だけで十分だ。言葉は、控え目の方がより多くを語るもの。沈黙こそ最大の雄弁である。

あそこにここに　仏の姿
ここにあそこに　本来心[26]

この自然界の何をとりあげてみても、それぞれが悟りの現われなのだ。

谷の水音　耳まで洗う
松の緑に　目までも緑[27]

絶え間なくザーザー聞こえてくる谷の音は、仏陀の声である。目に突きささる鮮やかな緑は、仏陀の姿である。

山の花　パッと開いて　あで姿
谷の水　あふれるばかり　藍の色[28]

今度は、

柳はみどり　花はくれない[29]

「返本還源（へんぽんげんげん）」、「十牛」第九図である。これは、先に見た万物一如、絶対平等の世界とは反対の、差別（しゃべつ）、つまり個別性の世界である。柳は緑だが、バラは紅。一方は緑、他方は紅。明らかに違う。ここでは、柳が緑である所以をしっかりと把握せねばならない。花が赤いという本来のありのままの真実を直視せねばならない。

山は山　水は水
何の変わりはないけれど[30]

男は男、女は女である。両者ははっきり異なる。犬はワンワン、猫はニャーニャー。烏はカーカー、鳩はポッポ。すべてのものがそれぞれ独自の個性を明快に示す世界である。これは、いわば〝Zen Individualism〟（個別主義）である。

せい高ノッポは　ノッポの仏
チビ助チッチャな　チビ仏[31]

この句は、禅を理解する上で重要である。「平等」即「差別」を示唆しているからだ。万物は、「法身」すなわち仏性を平等に備えている点で平等である。同時に、それぞれが独自の個性をもち、あるものは「長」、あるものは「短」、これは差別である。

平等一如は第一の真理、差別は第二の真理である。平等と差別は、それぞれ真実だが、両立しがたいように思われる。しかし、この一見矛盾する二つの命題が見事に一体となる時、次の句が生まれる。

松の色　昔も今も　変わらねど
竹の節　上と下との　分けへだて(32)

エリッヒ・フロムは、その著書『愛するということ』の中で「成熟した愛においては、二つの存在が一体となりながら同時に二つのまま、というパラドックスがおこる」と言っている。フロムは禅をかなり理解していたようだ。

白銀(しろがね)お皿に　雪をもる
明月しろじろ　白鷺(しらさぎ)かくす(33)

「皿」も白、「雪」も白、両者一体の、白一色の世界だ。が、両者はもともと別個の存在である。「白鷺」も「明月」も、共に別個の存在でありながら、白と白とで一色となり、一体となる。ここに「差別中の平等」「平等中の差別」がある。このところを、鏡の比喩によって説明してみよう。

禅の心は澄んだ鏡である。鏡は、心のもつ絶妙な働きを完璧に示してくれる。男が前に立てば、その男を写す。女が立てば、その女を写す。王様ならその王様を、乞食なら乞食を。誰がそこに立とうと、鏡はすべてを平等に写す。鏡は誰に対しても、何に対しても、まさに公平そのものである。完璧な公正さを示してくれるのだ。気に入らぬものだからといって写すのを拒んだ鏡が一体あっただろうか。

しかしながら、同時に、鏡は瞬時に識別する力をもっている。男が前にくれば、まさにその男を写す。女ならば、その女をありのままに写すまでだ。王様

なら、王様その人であって乞食ではない。乞食なら、その乞食を写すのであり王様ではない。鏡は、それぞれの個性を、個別に、一々峻別するのである。醜女を美女に写す鏡があるだろうか。

鏡は、「平等」の働きと「差別」の働きとを同時に兼ね備えているのみならず、無心と無執着の働きをもつ。鏡が像を写したことは確かなのに、あとに何物も残らない。写そうと思わず写し、消そうと思わず消す。ここに禅の働きがある。

「差別中の平等・平等中の差別」――この真実を看破すれば、万物はその本性を顕すのだ。森羅万象ことごとく鼓動を始め、大いなる生命が輝き出し、万物がそのままに宇宙の真実となるのである。大自然のうちにあって、個々の生命が自由自在に躍動する、大いなる調和の世界である。この世界を、我々の脚下に、日常生活の中に見出す――それが禅者の洞察力である。

マカ不思議　何たる奇蹟
水ガメかつぎ　たきぎを運ぶ[34]

何も難しいことはない。真実は、単純明快である。

腹へった　それ飯食うぞ
くたびれた　さあ寝るだけさ[35]

真実は、これ以上でもないし、以下でもない。禅の働きは、人間本来の自ずからなる営みに他ならない。

ある僧が百丈（720－814）に尋ねた。「この世で大事なことは何ですか。」百丈は答えた。

「坐禅して　ひとりゆうゆう　大雄山」[36]

これは有名な公案である。

趙州（778－897）が南泉（748－834）に尋ねた。「何が真実ですか。」南

泉は答えた。

「どこにいても　ふだんの心　それが禅」[37]

これもまた公案で、軽々しく扱う訳にはいかない。

V

三番目の「用」の句は、先の「相」の静的な美しい句とは対照的に、動的な自由自在の悟りの境界を示す「機語」で、「十牛」第十図「入鄽垂手」の世界。修行者は、修行によって得た慈悲の心をもって、人間にその姿を現わす。個人の内的体験を社会へ還元してゆくのだ。ここにこそ禅の修行の最終目標がある。そして、悟りの働きは、後に述べるように、利他行の実践へと進んでいくのである。

この「用」を表わす禅語には、面白い句が多い。分別くさい常識など、こっぱみじんに砕かれてしまうのだ。いつ、どこで、何が起こるか知れたものではない。

絵の中の　梅の匂いが　プンプンと[38]

大空が　笑ってクルリと　宙返り[39]

樹の上で　鯉がワハハと　笑い出す[40]

メダカがクジラ　飲みこんだ[41]

東山　テクテク歩く　水の上[42]

このような句なら、いくらでも見つかる。実際、禅者の型破りな自由自在の境界を表現した句の面白さを、十分に堪能することができるのだ。ユーモア、ノンセンス、ほら話、まるでアメリカのトール・テイルのようだ。すべてが自由自在である。様々な奇蹟が事もなく起こる。

だが、どうか気をつけていただきたい。中でも最後の「東山」の句などは、

有名な公案で、十分注意する必要がある。

ここで一つ、誤解のないようにつけ加えておきたい。禅者は、あらゆる意味で、自由を最大限に尊ぶ。だがその自由は、人の道をはずれることでは決してないはずだ。時に、少しばかりの修行によって、自信過剰の横柄な態度をとる者も少なからず見られる。どうやら禅には、うぬぼれ人間を更にうぬぼれにする毒があるようだ。

身体中　ウンコのにおい　プンプンプン[43]

はったり、無礼、高慢、傲慢――とんでもない。禅者の求めるものは、まさに精神の純粋さなのだ。誠実さと、謙虚さと、そして敬虔さの極致から生まれる絶対自由なのである。

この宇宙　たったひとりの　我は尊し[44]

とすると、この「我」は誰か。

VI

あいにく、これまでの説明で尽くせない句がなお多く残っている。それではさらに視点を変えて検討することにしたい。

修行生活で最も重要なことは、参禅である。修行者は、老師から与えられた公案に取り組み、参禅して、老師にみずからの見解（けんげ）を示すことになっている。

参禅の部屋は、いわば戦場であって、しばしば動物の穴蔵に例えられる。悟りという宝物は、そこにかくされているのだ。老師は、虎であり、獅子であり時には龍に例えられる。

修行者は、ひとりひとり洞穴に入り、悟りのために身を捨てて取り組むのだ。

トラのヒゲぬけ　龍のツノ切れ[45]

それは、命がけの仕事である。

スッパダシ　登れ刀の　山の上[46]

あらん限りの勇気をふりしぼって、その洞穴に飛び込むと――やっぱりいるではないか。

身がまえた　金毛ライオン[47]

こうして、悟りのための戦いが始まるのだ。老師の眼は、澄み切った鏡である。その鏡には、何もかもありのままに写るのだ。

この鏡　来れば何でも　ピタリと写す
器量よしでも　おかめでも[48]

すべては老師の手の内にある。まるで

活かすも殺すも　この手の内じゃ[49]

とでも言うかのようである。修行者の我執を奪いつくすためには、情容赦ない。

針の先っぽ　先まで削れ
サギのやせ肉　骨まで削れ[50]

老師の急務は、修行者を悟りへと導くことである。

死んだ蛇でも　ただひとひねり
たちまち龍の　活き姿[51]

そのための手段として、時には修行者に襲いかかる。

鼻の穴をば　ひんめくり

目玉二つを　えぐり出す[52]

あるいは、

頭から　泥水いっぱい　ぶっかける[53]

他方、修行者は、竹の銭筒の中にはいりこんで、出るに出られぬネズミ同然である。

竹筒の　中のネズミは　万事休す[54]

しかし、真実のためには修行者も遠慮することはない。

公案調べに　遠慮は無用
時に臨んで　師に一打[55]

参禅の一室は、まさに悟りをめぐる戦場である。
こうして、何度も老師に不合格の鈴を鳴らされながらも、くじけずに入室をくり返さなければならない。

猛虎のあごに　宝石キラリ
龍の穴蔵　真珠のありか[56]

ただ宝石（悟り）を求める一念があればこそ、この苦しみに耐えうるのである。
因みに、悟りに対する修行者の一途な思いは、恋する女にもたとえられる。

恋しお人の　ためならままよ
絹の着物も　帯をも捨てて
舞うも歌うも　いとし人ゆえ[57]

こうして、長い辛い努力の結果、修行者にもついに待ちに待ったその時が訪れる。

ひな鳥つつけば　親鳥つつく
同時に殻の　内と外[58]

時至って、卵の殻の内側からひな鳥がつつけば、時の至ったことを知った親鳥が、外側から殻をつつく。両者の呼吸がピタリと一致すれば、内側と外側とで軽くつつきあうだけで、簡単に殻が破れる。この「啐啄同時（そつたくどうじ）」の瞬間に、日頃の精進によって蓄積されたエネルギーが、歓喜の声と共に大爆発を起こすのである。

瓦こなごな　くだけて散った
固い氷も　サラリと溶けた[59]

事実、心が十分熟している修行者には、石ころが竹に当たってカチッと鳴るだけで、悟りのきっかけとなるのだ。中国の有名な香厳（きようげん）（？－898）の例にもあるように。

張さん酒飲みゃ　李さん酔払う[60]

以心伝心――それが禅の本当の師弟関係だ。ここには、正に禅の〝Radical Humanism〟（人間中心主義）がある。

「大灯国師遺戒」に、こんな一節がある。「もし誰か――野の片隅で、ひとにぎりの茅で屋根をふき、こわれた鍋で野菜の根を煮て食べるような質素な生活をしつつ、ひたすら自己の本来の姿を究明しようとしている者がおるならば、それは、わしの死んだ後も、毎日わしと顔を合わせ、仏恩に報いる人なのだ。」（現代語訳、筆者）禅は時間も空間も超える。我執の眼の汚れをぬぐい取りさえするならば、釈迦も達磨も日ごと目前に現われるのである。

三千里　はなれていても
この心　知る人がいる[61]

Ⅶ

すぐれた禅僧は、「機語」さながらに、自由自在の境地にあって、禅の働きを見せてくれるのだ。時には、虎やライオンとなり、また時に象や牛、龍や大鵬となって登場する。

大鵬が　翼広げりゃ　十国かくる[62]

その働きは、まさに超人的である。

大洋ひょいと　ひっくり返す
須弥山さっと　投げとばす[63]

また軽業師でもある。

針先で　とんぼ返りも　お手のもの[64]

決して主体性を失うことなく、只今取り組んでいるものごとに心を集中させるのだ。

殺すなら　血しぶき四方(よも)に　散らすまで[65]

三昧(さんまい)、つまり意識の集中が肝心なのである。だから禅僧は、一喝にも全精力を注ぐ。

ライオンの　ひと吠え百獣　頭こなごな[66]

その威厳は、百獣の王のものである。

ところで、以上のような修辞的な誇張も、科学的に見た時、必ずしも的外れだとも言い切れない。脳波の分析の結果、明らかになったことだが、熟練した禅僧の脳波は、眠っている人の場合と同じ程度の静けさを保ちながら、同時に外界からの刺激に対しては、その度ごとに極めて鋭敏な反応を示すのである。こうした事実の発見によって、禅僧は両立しがたい二つの正反対のことがらを一つにしてしまう魔術師であることが分かった。坐禅に全身全霊をうちこみながら、同時に、周囲のことに十分神経を配ることができるのだ。言いかえれば活き活きとした活動の真唯中にあって、完璧な静寂を保つのである。それは、ちょうど、最高の速度で回転している独楽が、静止しているように見えるのと同じである。(平井富雄『坐禅の脳波的研究』など参照。)

苦しい修行の結果おのずから生まれるこうした超能力の一面が、「機語」に見られるような誇張した表現で示されているのである。

もう一つ、禅僧の特徴があげられる。それは、おしなべて口が悪いことであろう。まず第一に槍玉にあげられるのが、言語文字にとらわれている人々である。

泥だんご　いじくりまわす　アホウども[67]

ボンクラ犬が　泥のかたまり　追いかける
メクラのロバが　仲間どこかと　追いすがる[68]

言葉は言葉。実体験は実体験。まず悟りを求めよ。そうすれば、おのずから禅の言葉が出てくるのだ。

次に「担板漢(たんばんかん)」。いつも片方の肩に板一枚かついでいるので、板の向う側の世界を見ることができない。つまり、ものごとをいつも一方的にしか見ることのできない人間だ。平等だけは知っているが差別を知らない。また差別だけで平等を知らない――そんな人間である。もともと平等と差別とは一つのものだということも知らない。

まっすぐ前方を見ていただきたい。それから、振り返って後を。

大空に　後もないし　前もない
鳥の道　東もないし　西もない[69]

もともと視界を二分するものなど、どこにもない。肩にのっかっているその板こそ、すべての迷いの根源なのだ。すぐさまその肩の板を取り除けばいいのだ。そして、次の二句の示すところをよく反芻するといい。

客と主人　主人になったり　客になったり[70]

客と主人　主人は主人　客は客[71]

三番目の例は、無用の長物。

十字路に　破れワラジが　ただひとつ[72]

こんな捨てられた破草鞋（はそうあい）など、一体何の役に立つのか。「無孔笛（むくてき）」（穴のない横笛）はどうか。閑古錐（かんこすい）（なまくらキリ）はどうか。破沙盆（はさぼん）（割れたすり鉢）はどうか。残念ながら、どれもこれも役立たずである。だが実は、こうした無用の長物もまた時に、禅者の理想の姿を示すのだ。なまくらの閑古錐（かんこすい）には、悟り臭さをプンプンさせる鋭い錐よりも、更に尊い無用の用がある。とかく禅は逆説的だ。

VIII

禅は哲学ではないが、思想的に理解するには、華厳経のインダラ網の寓話がよい手がかりとなろう。

インドラ（帝釈天）は、スメール（須弥）山頂に住む神である。その宮殿には巨大な網が張りめぐらされていて、その結び目ごとに宝石がついている。

インダラ網　宝石キラキラ
照らしあうこと　果てもなし[73]

この宝石のイメージは、この宇宙の森羅万象が完全な相依相関にあることを象徴しているのである。

この一即多・多即一、つまり個即全体・全体即個の思想こそ、禅の世界観である。個は全体のうちに含まれ、全体は個のうちに含まれる。個は、個でありながら、全体と関わりあってはじめて存在するのである。

月が写ってる　どの水面(も)にも
写る月かげ　もと月一つ(74)

最小が最大の中に、また最大が最小の中にある。

ノミにつくノミ　その目の中に
スメールの山　五つ六つ(75)

ウィリアム・ブレイクの言うように、この世界は一粒の砂、野の花は天国なのだ。

実際、森羅万象は、ただ一つの存在を維持するためにあると言える。全宇宙の無限の条件がすべて整って、はじめて一つの存在が可能となるのだ。もしも条件が、たった一つでも欠けたなら、あらゆるものが今存在していないはずだ。その意味で、この世のものは何もかも、無限の不可能のうちの唯一の可能性だったのである。これを奇蹟と呼ばずして何と呼ぶのか。

それでも、自分は、この世にあって完全に独立した存在だ、と言い張るつもりか。この宇宙から何の恩恵もうけていないと言い張るのか。それなら結構、ちょっとここへ来ていただこう。さもないことだが、やってみてもらいたい。鼻をつまんで、3分間息を止めて欲しい。この地球の上に足をおろさないように。水を飲むな。日光浴するな。……

自覚しているかどうかは別としても、すでに宇宙全体から無限の恩恵を受けているではないか。今までに一度も、あのまばたく星や満月と話をしたこともないのか。

悩みつきせぬ　我が心
ある夜おしゃべり　気が晴れた[76]

この宇宙は、「大いなる存在の連鎖」なのだ。万物は、完璧なエコロジーの調和の中にある。この大自然の躍動、リズムと一体になっていただきたい。大自然に直面し、生命の連鎖の神秘に、大いに眼を開いていただきたい。

日本人は、感謝の念を表わすとき、「有難う」と言う。文字通り、「存在し難い」という意味である。かって日本人たちは、よく言ったものだ。「ご飯を一粒でも粗末にすると、バチがあたるよ。」

どんなものでも粗末にしてはならない。この世のものは、何もかも「有難い」のだ。何もかも心をこめて扱うべきだ。もし一滴の水を粗末にするなら、自分自身の生命を粗末にしたのと同じだ。一滴の水が自分自身なのだから。万物が自分自身なのだから。

華厳の寓話の帰するところは「衆生」である。仏教徒は自然界の大生命の連鎖を信じている。人類はその一部だ。人間と他の動植物との関係は、決して支配したり、されたりする関係ではない。大自然は、一つ巨大な円であり、調和である。万物は親子兄弟なのだ。エマスンは、「野原や森が私にうなずき、私は皆にうなずき返すのだ」と言っている。私はゲーリー・スナイダーの「地球家族〝Earth House Hold〟」という作品の題名が大変気に入っている。私の言葉で言いかえれば、「宇宙家族〝Universe House Hold〟」である。

と同時に、万物はそれぞれ個性をもっている。鳥は空中を飛び、魚は海中を泳ぐ。人間はこの大地をふみしめて歩く。足の裏と土とが一体となって。禅僧もまさにそうだ。

「十牛」第十図を思い起こしていただきたい。慈悲の手を垂れて街頭に出るのは、禅の修行の当然の帰結であり、その最終目的なのだ。何故なら、深い慈悲の情は、悟りの体験から発露するものだからである。坐禅の修行を通して体得した自由自在の境界を、より多くの人々と分かち合うことになるのだ。

人も木も　石ころも見よ　慈悲の眼で[77]

言いかえれば、

人に木に　石ころにまで　その身をかくせ[78]

坐禅をするとき、眼は半分開けた状態に保つことになっている。このことは禅の修行が、ひとりよがりな白日夢にふけることでもなく、社会の現実から目をそらせることでもない、という事実を示している。そうではなくて、この世のありとあらゆるものに「慈悲の眼」を向けること――それが禅者の目ざすものである。

大悟した人　町角に住み
小悟の人は　山に住む[79]

禅者の最大の願いは、現実の人の世にあって、禅の自由自在の働きを示すことである。それがそのまま利他行となって、「十牛」第十図に描かれた世界を行ずることに他ならない。

ロバの世話さえ　すまないうちに
馬の用事が　もうやって来た[80]

次々に続くこの衆生済度の行を、黙々と実践するのみだ。

頭　灰まみれ　顔　泥まみれ[81]

汗は尊い。泥だらけ、汗まみれの着物は尊い。百丈禅師のモットーは、

仕事せぬ日にゃ　おまんま食べぬ[82]

寺の境内の草むしり、はき掃除は、禅僧の重要な日課の一つだ。

夕日をあびて　谷の落葉を　掃く僧ひとり[83]

何故、落葉をはくのか。一体「落葉」とは何か——落葉は、煩悩であり、執着の金鎖・鉄鎖である。ともすれば心の庭に積もりがちな落葉を、一枚一枚、根気強く掃き清めているのである。

悟り面など、言語道断。悟りの悪臭は直ちに断たねばならない。禅の実践には、ラッパもスタンドプレーも全くそぐわない。人知れず、密やかに、ただ黙々と、「陰徳」を積むのである。

そっと手助け　　そっと人助け
馬鹿で間抜けで　結構じゃないか[84]

悟りの徹底した禅者は、愚者と同じである。

まぬけ二人で　せっせと井戸に
雪を運んで　井戸埋める[85]

雪で井戸を埋めようというのだ。雪を井戸に投げ入れてもすぐ溶けてしまっていつまでたっても埋まる訳はない。無駄な仕事である。しかし、大いなる願いをもつ禅者は、この世を去る時まで、人知れず、ただ黙々と井戸に雪をはこび続けるのである。

IX

古来、日本の禅僧たちは、詩を大切にしてきたが、それは僧侶としての教養の一つでもあった。禅僧にとって、先人の語録を理解するのに不可欠であるしまた色々な儀式の際に、『禅林句集』から句を引いて作詩しなければならないからである。そのため、禅僧は、『禅林句集』や『塗毒鼓』を常に座右に備えておく必要があるのだ。かつて修行時代にやったように、句集を繰って、その儀式にふさわしい句を探すのである。

たとえば、禅宗の葬儀において、式の導師をつとめる禅僧は、引導の詩を吟

ずる。これは、亡者を彼岸へと渡す送別の辞でもある。式のクライマックスに至って、この詩の朗読が行われるのだが、多くの場合、それは、雷鳴のような一喝でしめくくられる。また、たとえば開山忌の法会には、住職はその寺の創建者（開山）の遺徳をしのび、詩を吟ずることになっている。この朗読も式の重要な要素である。吟じられた詩は、毛筆で紙にかかれ、本堂の柱に掲げられる。

禅の詩は、さらに日本文化に深くかかわっている。とりわけ、書道、茶道、水墨画、俳句などが、その著しい例である。

『禅林句集』は、古来、書家の座右の書でもある。それは、書家にとってもテーマの言葉を探すための格好の書であり、しばしば『句集』から取った句を作品に書くのである。また、禅僧も多くは、同時にすぐれた書家であり、時に画家でもある。それは、禅の自由自在の境界を表現するのに、極めて適した芸術形式だからである。

茶道もまた、禅の深い影響を受けた芸術である。抹茶を飲む儀式は、茶わんと茶を通じて禅の働きを表現した、一種のシンボリズムでもある。この意味では、床の間に飾られた掛け物は、茶の湯の儀式の最も重要な要素で、そこには茶会の中心となるテーマが書かれている。

掛け物に言う。

ちょっとおすわり　お茶でもどうぞ[86]

この句に茶道第一の心構えがある。この句に始まって、この句に終わる、とも言えよう。

もう一つ重要な句をあげると、

この出会い　たった一回　これっきり[87]

この世でたった一回のかけがえのない出会い――この思いに徹して、主人は客をもてなし、客はそのもてなしを受けるのだ。

茶道では、伝統的に禅僧の書を極めて大切にしている。だから、茶会のたびに、その季節や趣旨に最もふさわしい句の掛け物を取り出して飾るのである。

五月だったら、多分、

心地よい風　南から吹いて
ちょっぴり涼しい　この御殿[88]

秋になれば、

わが心　秋の夜空の　月に似て
キラキラ光る　谷の水面に[89]

世界で最も短い文学形式である俳句には、少なからず禅の影響が見られる。俳句と禅との関係を世界的視野から見るには、R・H・ブライスの数多い著作が参考になる。また、同じ意味で、芭蕉の禅的側面を論じたロバート・エィトケンの『禅波』がすぐれている。この中で著者は、芭蕉の代表的な句に、自作の詩によって「著語」している。この書は、私の知る限り、英語による著語の最初の例である。

因みに、公案の修行において時に使われる『世語(せご)集』なるものがある。これは、漢詩からなる『禅林句集』と違って、大和言葉の俳句、和歌、都々逸などから集められたもので、非常に面白い。これは、昭和32年、土屋悦堂編『禅林世語集』（其中堂）として世に出たが、一般に知られることの少ないのは残念である。

いずれにせよ、禅語というものが、過去において日本文化の創造に関わってきた役割を考えると、『禅林句集』もまた、日本文学・日本文化の研究にとって無視できぬ、重要な書物の一冊と言えるのではなかろうか。

X

以上、禅語をめぐって書きつらねてきたことは、実は、昨年出版された拙著 *A Zen Forest* 『英文禅林句集』のイントロダクション（英文）に書いたことが中心である。

私が禅語の英訳を思いたったのは、もう10年近く前のことである。以前から

アメリカ文学研究に携わってきたが、その間に、私は、禅の視点から分析したらさぞ面白かろうと思われる作家や作品に数多く出会ってきた。エマスン、ソロー、ホイットマン、ディキンスンなどは、全く禅仏教に接することがなかったにも拘わらず、典型的な禅の特質を数々備えている。また、現代作家をみても、サリンジャーやスナイダーのように、直接、禅者から影響を受けた作家たちは言うに及ばず、鈴木大拙やR・H・ブライスの書いた禅の紹介書を読んだと思われる作家たち、更に禅には全く無縁と思われる作家たちの中にも、事実禅の特質が躍如としていることが少なくないのである。

こうしてみると、アメリカ文学に禅を探る仕事は、誰かが、出来うることなら日本人が、是非とも本格的に取り組むべきではないか。そしてこの研究を、その場限りの思いつきでなく、禅という一つの視点に基づく文学研究として取り組むためには、まずその条件を整えることから始める必要がある。そう思われたのである。そこで真先に思いついたのが、『禅林句集』の英訳であった。実際、禅を文学の面から検討する際に不可欠の資料といったら、衆目の一致するところが『禅林句集』だと思われるからである。

この辺りのことは、既に記事になっているので、その一部分を引用しておく。

「禅文学は、人間存在の深奥を揺り動かし、迷妄を一瞬にして切断する句の連続である。その独特なユーモア、直截性、簡潔さ、イメージの豊かさなどは文学として第一級のものがあろう。言葉が本来の実体を失って、ただ空しく飛びかいがちな現代にあっては、何とも貴重である――こんなことを考えていた私の脳裏をふとよぎったこと、それは『禅林句集』を英訳することであった。この書は、禅の秀句を何千も集めたもので、版も内容も多様だが、禅に関わる者の必携の書である。禅が西欧に伝えられて一世紀にもなろうというのに、何故こんな重要なものに誰も手をつけなかったのか。もしこれが7，80年前に英語に訳されていたら、T・S・エリオットはどんな反応をしただろうか。E・パウンドはどうか、W・スティーヴンズだったら……といった楽しい空想が頭の中を駆けめぐった。かくして私は、身の程を省みず、この途方もない夢に殉ずることになったのだ。」（静岡新聞 1981年6月19日夕刊）

かつて、『禅林句集』は、禅家の必携書というだけでなく、日本の一般の教養ある人々にとっても無縁のものではなかったようだ。（一例をあげれば、夏

目漱石が『禅林句集』を大いに活用していたことは、漢詩の作品や『吾輩は猫である』、『草枕』などを読めば、すぐに分かることだ。）しかし、残念ながら現在の日本では、ごく特殊な書物として等閑視されている。ただ、現代人にとって漢文が死語に近いものになってしまったことを考えれば、やむをえないことであろうが。

だが、あたかも一教団の内輪の書にすぎないかのような扱いをされているこの『禅林句集』も、世界文学の中に投げ入れたら断然その輝きを増すはずだ、と私は考える。この点については、拙者のために寄せてくれたゲーリー・スナイダーの論文も大いに参考になる。次の一節は、あいにく筆者としてはいささかならず面映ゆい個所でもあるが、敢えて引くことにする。

> 本書（ *A Zen Forest* ）は……一種の「詩片からなる詩片」として、それ自体独り立ちしているのだ。我々は、今世紀のモダニストの詩から学び身につけてきたもののおかげで、重松氏の見事な翻訳を読んで、その独創的な詩の構成のあとをたどってゆくことができる。…… 本書がこうして世に出たのは、過去の禅匠たちと、20世紀の詩人たち、そして老婆たちとが、手を取り合ったからに違いない。（ゲーリー・スナイダー「*A Zen Forest* への序文」）

正にスナイダーならではの視点である。「今世紀のモダニストの詩」を一つのヒントにし、全体を「詩片からなる詩」の作品とするのが、私の密かな野望であったのだが、スナイダー氏に見事に看破された次第である。

先の記事からの引用を続けよう。

「ただし、いかに文学としてすばらしくとも、所詮、禅語は禅語である。その一句一句は、海面に現われた氷山の一角であって、海中深く沈む内なる体験こそが問題なのだ。だから、私はいつも「六根清浄」を唱え、しばし坐禅をしてからこの仕事に取りかかった。それだけの敬虔さと覚悟をもたないと、言葉が実体をもたないからだ。おまけに、禅語はその多くが秀れた詩の一節である。だから、たとえ散文として正しい英語に移し得ても、原文のもつ詩の生命が失われるなら、明らかに失敗だ。だから禅語としての着眼点に従い、英詩を創作するのが仕事なのだ。最終目標は、ことわざや美しい詩句のように、口ずさみ

たくなるような英語の活句に仕上げることなのだ。」

翻訳にあたって、私は、はじめ『禅林句集』と『塗毒鼓』を中心に1,700句を選び出し、英訳して私家版をまとめた。1,700としたのは、それが公案の数だとされていることに因んだまでである。ただし、拙著においては、その中から注意深く選び直して、「詩片からなる詩」にまとめるべく、1,234句にしぼった。

これらの句は、三つの観点から選んだものである。一つには、禅を理解する上で基本的なもの、知っていることが望ましい句、二つには、混迷の世にあって真実の自己にめざめ、人間らしく確かな人生を送りたい、と願っている人々にとって心の支えとなりうる句。そして三つには、この20世紀に生きる我々現代人の常識から見ても時代遅れでない句、ということを条件とした。東洋の伝説や史実に通じていなければ分からないもの、また三語以下の短い句も除くことにした。禅語としては、短い句ほど本質的なものとも言えるが、短いがために、なおさら長い説明を必要とするからである。

拙著に収めた句は、様々な出典によっている。だから、厳密に言えば、一句一句、その文学的スタイルも歴史も、みな違っている。たとえば、語録の禅問答から取られた句は、当然ながら口語的で生き生きしていて、具体的で、力強く、エネルギーに満ちあふれている。それに対して、投機の偈(げ)や遺偈から取られた句、唐詩から取られた句には、洗練された韻や対句の手法が見られる。特に、禅語においては、その視覚的効果も軽視できない重要な要素である。

くる日もくる日も　日は東から　　日日日(にちにち)東出
くる日もくる日も　日は西へ　　日日日西没

Day after day, day
dawns in the east;

Day after day, day's
done in the west.

この「日」(拙訳では〝d〟)の反復によって、一日一日が単調なリズムで繰り返されることの平凡さと、同時にそのように無類の正確さで繰り返される

ことの非凡さとが、一体となって表現されているからである。

この『禅林句集』英訳の仕事は、多くの点で初めての試みなので、注意深く作業を進めたつもりである。一句一句、直面し、そのエッセンスを把握するように努めたつもりである。

一歩一歩　行く足下に　そよ風起こる　　歩歩清風起

At each step,
the pure wind rises.

ただし私の最大の目標は、単に言葉を移し変えることではなく、あくまでも禅の詩の生命とリズムを英詩として表現することであった。勿論、原詩を軽視するつもりは毛頭ないが、時として、忠実な翻訳者の領域から飛び出したこともある。例えば、禅の特質を強調するために、原文にない命令形をしばしば用いたことなどがそうである。

私が恐れているのは ――というより本当はそう願っているのだが、英詩としての完成度を第一にしたため、必然的に「私の」英詩の作品になってしまったのではないか、ということである。

いずれにしても、もはや英語による禅文学の歴史が、本格的に始まってよい時期ではなかろうか。すでに先駆的な文学者たちも出ていることだし、現在も有力な作家で禅の修行に取り組んでいる者もいる。修行道場はあちこちに建てられて、着実に禅が西欧社会の中に立場を固めつつある。

今こそその時期だ。私の知る限りでは、現在アメリカに、日本禅の法灯をついだアメリカ人の老師（師家）が4人いる。彼らを中心として、当然これからは英語を母国語とする禅の指導者たちにとって、自らの禅体験を英詩として残すことが重要な任務となるだろう。

私が『禅林句集』を英訳出版したのは、「アメリカ文学の禅」研究への足がかりとするためであり、また英語による禅文学へのきっかけをつくるためでもあったのだ。幸い、昨秋、ジェームズ・カーカップ氏が、拙著の書評を *The Times Literary Supplement* (20 November 1981) に書いてくれたが、その中に拙訳の禅語が、活句となって散りばめられていた。今後、このように禅語を活用しうる「作家」の出現が期待される。作家（さつけ）とは、本来、禅語を活句となす禅者の

ことだからである。

〔註〕

本文中に取り上げた句は、すべて拙著 Sōiku Shigematsu, *A Zen Forest : Sayings of the Masters* (New York & Tokyo : Weatherhill, 1981) 所収のものである。以下、各句の原文と英訳文をあげておく。尚、本文中のものは、その現代日本語への試訳である。現代の我々にとって、禅語は、いささか高踏的な趣きもないではないが、ここでは「世語(せご)」を念頭に、敢えて、もっぱら平明を第一に心がけ、漢語をできるだけ避けて、五音句・七音句を用いた現代語に訳した。

(1) 一句合頭語　萬劫繫驢橛

A phrase
completely to the point:
The eternal
donkey hitching post.

(2) 教外別傳不立文字
直指人心見性成佛

Teaching
beyond teaching;
No leaning
on words and letters.
Point straight
at man's mind;
See its nature
and become Buddha!

(3) 如人飲水冷暖自知

The man who's
drunk water
Knows if it's
cool or warm.

(4) 言語道斷

Words
fail.

(5) 逢佛殺佛　逢祖殺祖

Meeting Sakyamuni,
kill him!
Meeting Bodhidharma,
kill him, too!

(6) 兩鏡相照

The two mirrors
reflect each other.

(7) 箭鋒相拄

Arrowhead and arrowhead
hit one another.

(8) 千峰盤屈色如藍

A thousand peaks,
winding, overlapping,
look like indigo.

(9) 前三三與後三三

Three-three
in front,
three-three behind.

(10) 爛泥裏有棘

In the soft mud
—a thorn.

(11) 丹青畫不成

Red and blue paints
draw it, only to fail.

(12) 喚之無聲　看之無形

Call it—
no answer;
Watch it—
no form.

(13) 展則彌綸法界
收則絲髮不立
Expanded,
it covers the Dharma world;
Pulled in,
no room for a hair.

(14) 美玉精金無定價
Bright pearls,
fine gold:
priceless.

(15) 十方世界一團鐵
The world of
ten directions:
one iron ball.

(16) 萬里一條鐵
Ten thousand miles—
a single strip of iron—

(17) 誰家無明月清風
Whose house has
no bright moon,
no clear wind?

(18) 風吹碧落浮雲盡
月上青山玉一團
Winds drive
all the clouds
off the blue heavens;
On the green mountain
the moon rises
—one round pearl.

(19) 前面瑪瑙　後面眞珠
Look ahead
—agates!
Turn back
—pearls!

(20) 柳不綠花不紅
Willows aren't green;
flowers are not red.

(21) 本來無一物
From the origins
nothing exists.

(22) 凡聖同居　龍蛇混雜
The ordinary and sacred
live together;
Dragons and snakes
all mixed up.

(23) 焦穀不生芽
Parched beans never
put forth sprouts.

(24) 髑髏遍野
Dry skulls . . . on . . .
the field . . . everywhere . . .

(25) 雨竹風松皆說禪
Rain bamboos,
wind pines:
all preach Zen.

(26) 頭頭顯露　物物全眞
Every head, each head
reveals it;
Each thing, every thing
shows it.

(27) 溪聲洗耳清　松蓋觸眼綠
The sounds of the valley
stream
wash your ears clean;
The canopy-like pine trees
touch your eyes green.

(28) 山花開似錦　澗水湛如藍
Mountain flowers,
like brocade;
Valley water brimming,
indigo.

(29) 柳綠花紅
Willows are green;
flowers, red.

(30) 山是山水是水
Mountains are mountains;
water, water.

(31) 長者長法身　短者短法身

A long one is
the Long Body of Buddha;
A short one
the Short Body of Buddha.

(32) 松無古今色　竹有上下節

No pine has two colors,
old and new;
The bamboo's knot marks
up and down.

(33) 銀盌盛雪　明月藏鷺

To heap a silver bowl
with snow;
To hide a white heron
in the bright moon.

(34) 神通並妙用　荷水也搬柴

Magical power,
marvelous action!
Carrying water,
shouldering wood. . . .

(35) 飢來喫飯困來眠

Eat when hungry!
Sleep
when tired!

(36) 獨坐大雄峰

Sitting alone
on this Great Hero Peak!

(37) 平常心是道

Ordinary mind
is the Way.

(38) 畫梅香芬芬

Shot after shot of scent
from pictured plum blossoms.

(39) 虛空咲點頭

A void sky laughs
and bows.

(40) 樹上鯉魚開口笑

A carp laughs,
opening its mouth,
on a treetop.

(41) 小魚呑大魚

A small fish swallows
a big fish.

(42) 東山水上行

The eastern mountains
walk on the waters.

(43) 自屎不覺臭

The stink of shit
wraps him up.

(44) 天上天下唯我獨尊

Above the heavens,
below the heavens:
Only I
am holy.

(45) 拔猛虎鬚　截蒼龍角

Pluck out
the savage tiger's whiskers!
Cut off
the green dragon's horns!

(46) 赤脚上刀山

Climb barefoot
a mountain of swords!

(47) 踞地金毛獅子

Crouched on the ground
—a gold-haired lion.

(48) 明鏡忽臨臺　當下分姸醜

The clear mirror,
seeing the object,
Instantly discriminates
the beautiful and the ugly.

(49) 殺活在手裡

Killing or vivifying
is in these hands.

(50) 針頭削鐵　鷺股割肉

Shave off iron
from a needle's point!
Scrape off meat
from a heron's thigh!

(51) 弄得死蛇成活龍

Try and make
a dead snake
a live dragon.

(52) 穿人鼻孔　換人眼睛

Drill
his nostrils!
Gouge out
his eyeballs!

(53) 惡水驀頭澆

Pour dirty water
right over the head!

(54) 鼠入錢筒伎已窮

Entering the money tube,
the rat already
at its wits' end.

(55) 棒下無生忍　臨機不讓師

Under the staff blows,
seeking satori—
No concession to your roshi
at that moment.

(56) 猛虎頷下金鈴
蒼龍窟裏明珠

Under the fierce tiger's jaw
—a golden bell!
In the blue dragon's cave
—a bright pearl!

(57) 羅襦寶帶爲君解
燕歌趙舞爲君開

Wish I could undo
my veil and pearl sash
—for your sake!
Wonderful singing,
subtle dancing
—for your sake!

(58) 啐啄同時

Pecking the eggshell
at once from inside and out.

(59) 瓦解氷消

Bricks shattered,
ice melted!

(60) 張公喫酒李公醉

Chang
drinks wine:
Li gets drunk.

(61) 三千里外有知音

Three thousand miles away—
another one
who knows.

(62) 大鵬展翅蓋十洲

The giant roc,
spreading its wings,
covers ten countries.

(63) 掀翻大海　趯倒須彌

Hold the great sea
upside down!
Topple over
Mount Sumeru!

(64) 針鋒頭上蹶筋斗

Turn
a somersault
on a needle point.

(65) 煞人須見血

Killing a man: do it
till the blood gushes out.

(66) 獅子哮吼百獸腦裂

One roar
of a lion
Cracks the brains
of a hundred beasts.

(67) 一火弄泥團漢

A group
of mud-kneading men.

(68) 狂狗逐塊　瞎驢趁隊

A crazy dog
chases a clod;
A blind donkey
pursues the herd.

(69) 虛空無背面　鳥道絕東西

The vacant sky—
no front, no back;
The birds' paths—
nc east, no west.

(70) 賓主互換

Guest and host:
interchangeable.

(71) 賓主歷然

Guest, host—
obviously different.

(72) 十字街頭破草鞋

On the crossroads,
a pair of broken
straw sandals.

(73) 帝網重重主伴無盡

Jewels
on Indra's net
Reflect each other
endlessly.

(74) 一月普現一切水
一切水月一月攝

One moon
shows
in every pool;
In every pool
the one
moon.

(75) 螟眼裏五須彌

Inside the eye
of a flea's flea:
Five Mount Sumerus.

(76) 無限心中不平事
一宵閑話又作平

Ceaseless
worries
of my mind:
One evening's
talk
unburdens it.

(77) 慈眼視衆生

Watch all sentient beings
with merciful eyes.

(78) 森羅影裏藏身

Hide yourself in
each and every thing.

(79) 大隱隱朝市　小隱隱山林

The accomplished hermit
hides in the town;
The immature hermit
hides in the mountain.

(80) 驢事未了馬事到來

A donkey matter's
unsolved but—
A horse problem's
already come.

(81) 灰頭土面

Ash-sprinkled head,
soil-smeared face.

(82) 一日不作　一日不食

One day
no work,
One day
no food.

(83) 溪邊掃葉夕陽僧

Sweeping leaves by the valley
in the evening sun
—a monk.

(84) 潛行密用如愚如魯

Secret exercise,
hidden work:
Like a fool,
like an idiot.

(85) 傭他痴聖人　擔雪共塡井

Hiring another
holy idiot,
Trying to fill up the old well
with the snow they're carrying.

(86) 且坐喫茶

Sit down, please.
Have a cup of tea!

(87) 一期一會

One encounter:
once for all.

(88) 薫風自南來　殿閣生微涼

Fragrant winds
come from the south:
A slight coolness is
brought into the palace.

(89) 吾心似秋月　碧潭清皎潔

My mind is
like the autumn moon:
Shining, bright, reflected
on the clear creek.